

小中一貫教育の推進～学校種間の円滑な接続を図る実践を通して～

登別市立鷺別中学校 学級数 12 (校長 横山 康彦)

実践の概要

本校では、令和3年度からの3年間、北海道教育委員会による「中1ギャップ問題未然防止事業」の指定を受け、小・中学校間の円滑な接続体制を構築し、学習指導と生徒指導を関連付けた教育活動の改善・充実を図る実践を通して、小中一貫教育を推進している。

1 実践の目的

鷺別中学校区が目指す15歳の姿「受け入れ合い、支え合い、高め合う生徒」を学校・家庭・地域が一体となって実現するため、鷺別中学校区小中一貫教育推進協議会（以下、推進協議会）を核として、3つの共通実践項目（「意見を伝える力(表明)力の向上」「難しいことでも失敗を恐れずに挑戦する態度の向上」「自分と違う意見について考えるのは楽しい態度の向上」）を組織的に取り組むことにより、よりよい人間関係を築く力を育成し、中1ギャップ問題の解消や未然防止を図ることを目的としている。

2 実践内容

(1) 実施計画

次の計画により検証改善サイクルを確立させ、本実践を推進した。

推進協議会による取組の方向性の確認と推進計画立案
分科会（教務・指導・研修）による共通実践項目の推進
各種調査・アンケートによる検証（結果の分析・改善策）
改善の方向性を踏まえた持続可能な取組内容の充実

(2) 取組の具体

推進協議会において、推進校である中学校と校区の小学校2校のミドルリーダーで構成する3つの分科会を設置し、共通実践項目に向けた組織的な取組をそれぞれの部会で推進した。

教務部会（教育課程の編成・実施）

- ・定期的な3校相互による授業参観の実施
 - ・新入生体験入学（年2回）・保護者説明会・引継等の効果的な実施
- 指導部会（生徒指導の推進）
- ・鷺別レインボー7（子供たちに大切にしてほしい7つの事柄）の啓発
 - ・児童会・生徒会が主体となった共同・合同の取組

研修部会（校内研修の推進）

- ・教員の共通理解を深める合同研修会の実施
- ・共通実践項目と関連付けた校内研修の取組

(3) 取組後の点検・評価、工夫改善

共通実践項目に係る児童生徒の変容は、次の調査等により検証した結果、数値の改善が見られた。また、推進協議会では、毎回、生徒指導について交流し、不登校児童生徒やいじめ問題等に係る状況等の共通理解を図った結果、当該児童生徒に関する共通理解や対応方法に係る協議を充実させることができた。

- ・子ども理解支援ツール「ほっと」(年2回)(同一集団比較)
- ・全国学力・学習状況調査「児童生徒質問紙」(同一学年比較)
- ・共通実践項目に関する内容を付加した「学校評価(教職員)」と「アンケート(保護者)」(経年比較)

(4) 改善後の取組

各種調査やアンケート実施後、推進協議会や合同研修会において、調査結果や分析結果を提示し、3校の教員で共通理解を図るとともに、各校の取組の改善・充実に生かせるようにしている。また、中1ギャップに係るアンケート結果については、小中一貫教育たより等により児童生徒・保護者に周知し、入学後の不安や悩みが少しでも解消されるように努めている。

3 実践のポイント

指定事業終了後も、持続可能な中1ギャップ問題未然防止を含めた小中一貫教育の取組を推進するため、校区の連携・協働体制をより一層充実させ、効果的な検証改善サイクルによる取組内容の改善・充実に継続的に取り組むことができるよう小中連携した組織体制を構築・運用したこと



【新入生体験入学の様子】



【3校合同研修会の様子】

地域で一貫した英語教育の実現に向けた校種間連携の充実

更別村立更別中央中学校 学級数3 (校長 島村 雅樹)

実践の概要

本校は、進学に当たり中学校生活に対し不安を抱える生徒がいることから、小・中学校の学びの連続性を意識した指導の充実を図るため、言語活動の学習到達目標を明確にした授業等、英語教育を通して、小・中学校の円滑な接続に向けた取組を推進している。

1 実践の目的

生徒アンケートにおいて、「英語の勉強は大切だと思うか」の項目で肯定的な回答をした生徒の割合が97%であり、身に付けた知識・技能の活用や生活との関連を図った言語活動の取組の効果が見られている一方、「英語の勉強は好きか」の項目で肯定的な回答をした生徒の割合が50%であることから、児童生徒の学びの連続性を意識した指導の充実を図ることにより、中学校の英語の授業への円滑な接続を図る。

2 実践内容

(1) 実施計画

- ・小中連携型のCAN-DOリストの作成及び学習到達目標を明確にした授業づくり
- ・小・中学校の円滑な接続に向けた言語活動の工夫

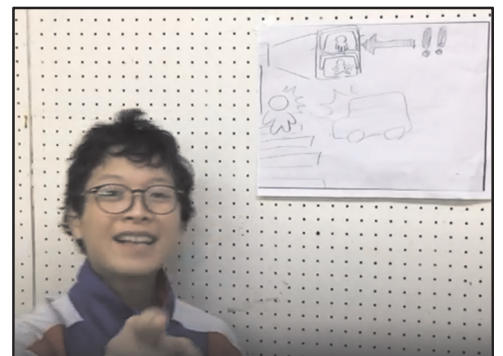
(2) 取組の具体

小中連携型のCAN-DOリストの作成及び学習到達目標を明確にした授業づくり

小学校と中学校、それぞれの卒業時の学習到達目標を設定したCAN-DOリストを作成し、必要に応じて修正しながら、地域や行事を題材とした言語活動の学習到達目標を明確にした授業を行った。

小・中学校の円滑な接続に向けた言語活動の工夫

中学校第1学年の生徒が小学校第6学年の児童に向け、自作のイラストを示しながら中学校生活について説明する動画を作成することにより、新入生に中学校生活のイメージをもってもらえるよう、相手を意識し考えを伝える姿が見られるとともに、後日、映像を視聴した児童の感想を生徒にフィードバックし、生徒の学習の成果を実感させることができた。また、児童は、中学校での学習モデルのイメージをつかんだり、中学校生活に係る事柄について、簡単な語句や基本的な表現を聞き取ったりする姿が見られた。



【中学生が中学校生活について説明している様子】

(3) 取組後の点検・評価、工夫改善

上記の活動後の生徒アンケートでは、「英語の勉強は好きか」の項目で肯定的な回答をした生徒の割合が令和4年10月と比較して6%増加し、56%になった。また、「英語の授業はよく分かるか」の項目で肯定的な回答をした生徒の割合が令和4年10月と同じ割合であったが、否定的な回答をした生徒の割合が、令和4年10月の23%から令和5年1月は13%に減少した。

生徒の身近な場面、相手、目的に応じた自分の考えや気持ちなどを適切に表現する活動を設定したことにより、生徒が実際のコミュニケーションにおいて身に付けた英語の音声や語句、表現、文法の知識を活用する生徒が増えるなど、生徒が自分の考えなどを表現する力を高めることができた。

(4) 改善後の取組

小学校で慣れ親しんだ語句や表現を用いた言語活動を日常的に行うことにより、目的や場面、状況に応じたパフォーマンステストやレポート課題などに意欲的に取り組もうとする姿が見られるなど生徒の英語を用いた課題解決能力の向上につながった。

3 実践のポイント

- ・小・中学校の円滑な接続のために交流後の感想等を児童生徒へフィードバックしたり、児童生徒が学びを実感し主体的に学習に取り組めるよう働きかけをしたりするなど、CAN-DOリストに基づいた授業実践を通し、英語の学習に対する意欲を高めたこと
- ・小学校教諭と中学校教諭の授業交流を通し、英語の授業の在り方や中学校への円滑な接続について、理解を深め、地域で一貫した英語教育の実現に向けた校種間連携の充実を図ったこと